

我が子の死

西田幾多郎

青空文庫

三十七年の夏、東圃君が家族を携えて帰郷せられた時、君には光子という女の児があつた。愛らしい生々した子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にもこの子を失われたので、余は前年旅順において戦死せる余の弟のことなど思い浮べて、力を尽して君を慰めた。しかるに何ぞはか凶らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになりたる己がおの次女を死なせて、かえつて君より慰めらるる身となつた。

今年の春は、十年余も足帝都を踏まなかつた余が、思いがけなくも或用事のために、東京に出るようになった、着くや否や東圃君の宅に投じた。君と余とは中学時代以来の親友である、殊に今

度は同じ悲をかなしみ抱きながら、久し振りにて相見たのである、単にいつもの旧友に逢うという心持のみではなかつた。しかるに手紙にては互に相慰め、慰められていながら、面と相向うては何の語も出ず、ただ軽く弔辞を交換したまでであつた。逗留七日、積る話
はそれからそれと尽きなかつたが、遂に一言も亡児の事に及ばな
かつた。ただ余の出しゅつ立たつの朝、君は篋きやうてい底を探りて一束の草
稿を持ち来りて、亡児の終しゆうえんき焉記なればとて余に示された、かつ
今度出版すべき文学史をば亡児の記念としたとのこと、及び余
にも何か書き添えてくれよということをも話された。君と余と相
遇うて亡児の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れていたの
ではない、また堪え難き悲哀を更に思い起して、苦悶を新にする

に忍びなかつたのでもない。誠というものは言語に表わし得べきものでない、言語に表し得べきものは凡て浅薄である、虚偽である、至誠は相見て相言う能わざる所に存するのである。我らの相對して相言う能わがりし所に、言語はおろか、涙にも現わすことのできない深き同情の流が心の底から底へと通うていたのである。

余も我子を亡くした時に深き悲哀の念に堪えなかつた、特にこの悲が年と共に消えゆくかと思えば、いかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死にし子の面影を書き残した、しかして直にこれを東圃君に送つて一言を求めた。当時真に余の心を知つてくれる人は、君の外にないと思うたのである。しかるに何ぞ図らん、君は余よりも前に、同じ境遇に会うて、同じ事を企てられたので

ある。余は別れに臨んで君の送られたその児の終焉記を行李こうりの底に収めて歸つた。一夜眠られぬままに取り出して詳つまびらかに読んだ、読み終つて、人心の誠はかくまでも同じきものかとつくづく感じた。誰か人心に定じようほう法なしという、同じ盤上に、同じ球を、同じ方向に突けば、同一の行路をたどるごとくに、余の心は君の心の如くに動いたのである。

回顧すれば、余の十四歳の頃であつた、余は幼時最も親しかつた余の姉を失うたことがある、余はその時生来始めて死別のいかに悲しきかを知つた。余は亡姉を思うの情に堪えず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き処に到りて、思うままに泣いた。稚おきな心ごころにもし余が姉に代りて死に得るものならばと、心から思つた

ことを今も記憶している。近くは三十七年の夏、悲惨なる旅順の戦に、ただ一人の弟は敵墨深く屍を委^{まか}して、遺骨をも収め得ざりし有様、ここに再び旧時の悲哀を繰返して、断腸の思未だ全く消失^{きえう}せないのに、また己^{おの}が愛児の一人を失うようになった。骨肉の情いずれ疎^そなるはなけれども、特に親子の情は格別である、余はこの度^{たび}生来未だかつて知らなかつた沈痛な経験を得たのである。余はこの心より推して一々君の心を読むことが出来ると思う。君の亡くされたのは君の初子^{はつご}であつた、初子は親の愛を専らにするが世の常である。特に幼き女の子はたまらぬ位に可愛いとのことである。情濃^{こま}やかなる君にしてこの子を失われた時の感情はいかがであつたらう。亡き我児の可愛いというのは何の理由もない、

ただわけもなく可愛いのである、甘いものは甘い、辛いものは辛いというの外にない。これまでにして亡くしたのは惜しかろうと
いって、悔んでくれる人もある、しかしこういう意味で惜しいと
いうのではない。女の子でよかったとか、外に子供もあるからな
どといつて、慰めてくれる人もある、しかしこういうことで慰め
られようもない。ドストエフスキーが愛児を失った時、また子供
ができるだろうといつて慰めた人があつた、氏はこれに答えて

『How can I love another Child? What I want is Sonia.』といつたと

いうことがある。親の愛は実に純粹である、その間一毫も利害
得失の念を挟む余地はない。ただ亡児の^{おもかけ}倂を思い出^いずるにつれて、
無限に懐かしく、可愛そ^うで、どうにかして生きていてくれれば

よかつたと思うのみである。若きも老いたるも死ぬるは人生の常である、死んだのは我子ばかりでないと思えば、理においては少しも悲しむべき所はない。しかし人生の常事であつても、悲しいことは悲しい、飢渴きかつは人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は死んだ者はいかにいつても還らぬから、諦めよ、忘れよという、しかしこれが親に取つては堪え難き苦痛である。時は凡てすべの傷を癒やすというのは自然の恵めぐみであつて、一方より見れば大切なことかも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を残してやりたい、せめて我一生だけは思い出してやりたいというのが親の誠である。昔、君と机を並べてワシントン・アービングの『スケッチブック』を読んだ時、

他の心の疵きずや、苦みはこれを忘れ、これを治せんことを欲するが、独り死別という心の疵は人目をさけてもこれを温め、これを抱かんとことを欲するというような語があつた、今まことにこの語が思い合されるのである。折にふれ物に感じて思い出すのが、せめてもの慰藉いしやである、死者に対しての心づくしである。この悲は苦痛といえば誠に苦痛であらう、しかし親はこの苦痛の去ることを欲せぬのである。

死にし子顔よかりき、をんな子のためには親をさなくなりぬべしなど、古人もいったように、親の愛はまことに愚痴である、冷静に外より見たならば、たわいない愚痴と思われるであらう、しかし余は今度この人間の愚痴というものの中に、人情の味のある

ことを悟った。カントがいった如く、物には皆値段がある、独り人間は値段以上である、目的其^{そのもの}者である。いかに貴重なる物でも、それはただ人間的手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴い者はない、物はこれを償^{つぐな}うことが出来るが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償うことは出来ぬ。しかしてこの人間の絶対的価値ということが、己が子を失うたような場合に最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテがその子を失った時『Over the dead』と云うて仕事を続けたというが、ゲーテにしてこの語をなした心の中には、固^{もと}より仰ぐべき偉大なるものがあつたでもあろう。しかし人間の仕事は人情ということを離れて外に目的があるのではない、学問も事業も究^{くつきよう}竟^{きやう}の目的は人情

のためにするのである。しかして人情といえ、たとい小なりとはいえ、親が子を思うより痛切なるものはなからう。徒らに高く構えて人情自然の美を忘るる者はかえつてその性情の卑しきを示すに過ぎない、「征馬不前人不語、金州城外立斜陽」の句ありていよいよ乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今度我子の果敢はかなき死ということによりて、多大の教訓を得た。名利みょうりを思うて煩悶絶間なき心の上に、一いっしやく杓

の冷水を浴びせかけられたような心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥より秋の日のような清く温き光が照して、凡すべての人の上に純潔なる愛を感じることが出来た。特に深く我心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌ったり、遊んだりして

いた者が、忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、如何なる訳であろうか。もし人生はこれまでのものであるというならば、人生ほどつまらぬものはない、此処ここには深き意味がなくてはならぬ、人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するというのが人生の一大事である、死の事実の前には生は泡沫の如くである、死の問題を解決し得て、始めて真に生の意義を悟ることができる。

物窮きわまれば転ず、親が子の死を悲しむという如きやる瀬なき悲哀悔恨は、おのずから人心を転じて、何らかの慰安の途を求めしめるのである。夏草の上に置ける朝露よりも哀れ果敢なき一生を送った我子の身の上を思えば、いかにも断腸の思いがする。しか

し翻つて考えて見ると、子の死を悲む余も遠からず同じ運命に服従せねばならぬ、悲むものも悲まれるものも同じ青山の土塊と化して、ただ松風虫鳴のあるあり、いずれを先、いずれを後とも、分け難いのが人生の常である。永久なる時の上から考えて見れば、何だか滑稽にも見える。生れて何らの発展もなさず、何らの記憶も遺さず、死んだとて悲んでくれる人だにないと思えば、哀れといえばまことに哀れである。しかしいかなる英雄も赤子も死に對しては何らの意味も有^もたない、神の前にて凡て同一の靈魂である。オルカニヤの作といい伝えている画に、死の神が老若男女、あらゆる種々の人を捕え来りて、帝王も乞食もみな一^{いっ}堆^{たい}の中に積み重ねているのがある、^{えいじよく}栄辱^{えいじよく}得失もここに至つては一場の夢に

過ぎない。また世の中の幸福という点より見ても、生延びたのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか、生きていたならば幸であつたらうというのは親の欲望である、運命の秘密は我々には分らない。特に高潔なる精神的要求より離れて、単に幸福ということから考えて見たら、凡て人生はさほど慕^{すべ}うべきものかどうかとも疑問である。一方より見れば、生れて何らの人生の罪惡にも汚れず、何らの人生の悲哀をも知らず、ただ日々嬉^{きぎ}戲して、最後に父母の膝を枕として死んでいったと思えば、非常に美しく感じがする、花束を散らしたような詩的一生であつたとも思われる。たとえ多くの人に記憶せられ、惜まれずとも、懐かしかつた親が心に刻める深き記念、骨にも徹する痛切なる悲哀は寂しき

死をも慰め得て余りあるとも思う。

最後に、いかなる人も我子の死という如きことに対しては、種々の迷を起さぬものはなからう。あれをしたらばよかつた、これをしたらよかつたなど、思うて返らぬ事ながら徒らなる後悔の念に心を悩ますのである。しかし何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく内からも働く。我々の過失の背後には、不可思議の力が支配しているようである、後悔の念の起るのは自己の力を信じ過ぎるからである。我々がかかる場合において、深く己の無力なるを知り、己を棄てて絶大の力に帰依きえする時、後悔の念は転じて懺悔ざんげの念となり、心は重荷を卸おろした如く、自ら救い、また死者に詫わづびることができ。『歎異抄』に「念仏はま

ことに浄土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に墮おつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」といえる尊き信念の面影をも窺うかがうを得て、無限の新生命に接することができ
る。

（「藤岡作太郎著『国文学史講話』序」明治四十年十一月稿、第一卷）

青空文庫情報

底本：「西田幾多郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年9月16日第3刷発行

底本の親本：「西田幾多郎全集 第一巻」岩波書店

1987（昭和62）年11月

初出：「国文学史講話」東京開成館、大坂開成館

1908（明治41）年3月15日発行

※初出時の表題は「東圃學兄が其著國文學史講話を亡兒の記念として出版せらるゝに當りて、余の感想を述ぶ」です。

入力：アキトチ

校正：鈴木厚司

2003年10月23日作成

2016年2月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

我が子の死

西田幾多郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>